



世界会議、仕事における安全の改善に向けた 新たな世界的パートナーシップを呼びかける

【2008年7月2日ソウル発ILOオンライン・ニュース】第18回世界労働安全衛生会議は、職場における安全衛生の強化並びに死亡者数及び疾病の削減に向けた取り組みの強化を図る新たな世界的パートナーシップを呼びかけて閉幕しました。

基調講演を行った国際自然保護連合（IUCN）の主任研究員、ジェフリー・A・マクニーリー博士は、環境課題と職業上の安全面における課題の二つが注目すべき収斂を示していることに触れ、労働安全衛生の世界記録を大きく改善するには新たな手法が求められると指摘しました。

閉会式で講演したマクニーリー博士は、労働安全・予防に関係する人々は気候変動の経験から貴重な教訓を学べるのではないかと提唱し、科学界の強いコンセンサス、一般の人々の意識、経済的インセンティブ、新たなパートナーシップ、堅固な法的基盤のすべてが世界的な変化を形成する条件になったと紹介しました。

会議の始めのほうで、ILOは新しい報告書「Beyond deaths and injuries: The ILO's role in promoting safe and healthy jobs（死傷災害の克服：安全で健康的な仕事の促進におけるILOの役割・英語）」を提出し、より安全な職場の必要性を強調しました。報告書を紹介したILO労働安全衛生・環境国際計画のサミーラ・アルトゥワイリ部長は、より効果的な戦略及び政策の確保に向けた安全衛生に携わる様々な行為主体の新たな協働を呼びかけて次のように語りました。「あまりにも多くの不必要な死や人間の受難が存在するという事実について、私たちは世界の責任を問う必要があります。」

会議に先立ち、政府閣僚、主要多国籍企業の最高経営責任者、社会保障界の指導者、安全衛生の上級専門家、労使代表を含む約50人のハイレベル代表が集い、初のハイレベル安全衛生サミットが開催されました。

サミット参加者は、使用者、労働者、政府が職場における事故と疾病の削減に向けた協力を強化する際の基準点を設定する史上初の安全衛生宣言に署名しました。

2008年6月29日から7月2日に韓国・ソウル市で開かれた第18回世界会議には、120カ国以上から労働安全衛生専門家を始めとする4,500人近い参加者があり、60年に及ぶこの会議の歴史の中で最大規模のものとなりました。

最高水準の技術部会、40を超えるシンポジウム、ポスター発表、地域会議など、参加者間の知識と好実践事例の共有促進を目指した多彩なプログラムが繰り広げられました。会議と平行して安全衛生機関や安全衛生製品の国際展示会も開かれました。

press release

会議の中では、グローバル化、移住、生産性上昇に向けた圧力は、労働者の安全衛生に新たな課題をもたらしていることが認識されましたが、働く人々がより健康でより幸福であれば企業はより生産的になるため、訓練、予防、労働条件引き上げに対する投資は経営上理にかなっていることが研究によって確認され、予防に対する支出は報われることが証明されました。

閉会式において、トルコのムスタファ・コヌク労働・社会保障副次官は、ILO及び国際社会保障協会（ISSA）と協力し、2011年に第19回世界労働安全衛生会議をイスタンブールに招致する自国の意向を再確認しました。

フィルムやマルチメディアは安全衛生事項に関する教育、訓練、啓発のための重要な道具になります。世界会議に合わせて開催された第7回国際フィルム・マルチメディア・フェスティバルでは115本のフィルムと50本のマルチメディア作品が発表されました。

コンクールの結果を発表するに当たり、ISSA予防部会のマルク・デ・グレーフ部長は応募作品の質を賞賛し、その効果、テーマの扱い方、全体的な印象を元を選考したと語りました。全入賞作品のリストはISSAのホームページ（<http://www.issa.int>）でご覧になれます。

世界労働安全衛生会議はILOとISSAが共催し、3年ごとに開かれます。第18回世界労働安全衛生会議は韓国産業安全衛生公団（KOSHA）が受入団体となって開かれました。